東北準備室活動報告

対応へ建設技術研究

初期整備20キロ程度に短縮検討

東北誘致

東北ＩＬＣ準備室の活動を報告する（右から）大平尚企画理事、鈴木厚人学長、宇部文雄顧問＝仙台市内

国際リニアコライダー（ＩＬＣ）の東北誘致を目指す東北ＩＬＣ準備室長の鈴木厚人県立大学長は６日、仙台市内で報道各社に活動報告した。国際研究者組織が検討中の初期整備延長の短縮（ステージング）に対応した建設技術などを研究していると説明した。

ＩＬＣを推進する国際将来加速器委員会（ＩＣＦＡ）は初期整備延長を31キロから20キロ程度に短縮し、建設費削減を図るステージングを導入する方針。鈴木学長によると、準備室では誘致決定後速やかに建設に入れるよう、地下トンネルの掘削方法など技術面を詰めている。

地域の受け入れ態勢としては、海外から取り入れる超電導加速空洞などの試験施設を港湾に整備する想定で施設の在り方を検討。まちづくりは研究所を中心に盛岡―仙台間でデザインを進めている。

同準備室は東北ＩＬＣ推進協議会が昨年６月設置。広報、地域、技術、産業のアクションプランの２専門部会が活動。８月下旬から９月上旬ごろ検討の成果の公表を目指す。

ＩＬＣは岩手、宮城にまたがる北上山地（北上高地）が世界最有力の建設候補地とされ、日本政府は今年から来年にかけて国内誘致の可否を判断する見通し。

活動報告には副室長の宇部文雄東経連顧問と県の大平尚企画理事も同席。鈴木学長は「準備室発足から１年間、驚くほどの勢いで検討を進めることができた。政府が早く決断するよう、最大限の努力したい」と述べた。